
涙のリクエスト

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙のリクエスト

【Nコード】

N0884K

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夜の電話ボックスに飛び込んで最後のコインでリクエストする曲は。チェッカーズ第四十八弾は名曲中の名曲です。チェッカーズといえはこの曲という人も多いのではないでしょうか。

第一章

涙のリクエスト

俺は電話ボックスに入った。真夜中の誰もいない夜道の中に浮かぶようにしてぽつんとあったその電話ボックスに入って。それから財布の中を探った。

「よかった、あつたな」

まずはあるのを確かめてほつとした。コインは一枚だけ残っていた。

「バイト料が入るのもまだ先だしな」

俺は一人呟いた。残念ながら俺は金はない。高校でもいつも遊んでいて金がない。それでバイトばかりしているのが俺の日常だ。

「それじゃあな」

その俺が電話のダイヤルを回してそれでかけたのはラジオ局だった。そこで歌をリクエストする。

「この曲ですね」

「ああ、その曲な」

こう電話に出て来たDJに答える。

「その曲な。それでさ」

「はい。伝言ですか？」

「ああ。あの娘に伝えて欲しいんだ」

「あの娘!？」

「こつちの話だよ」

それが誰かはあえて言わなかった。あくまで俺だけの話だったから。

「だからあの娘でいいから」

「そうですか」

「それで曲は」

ここからが本題だった。DJにその曲をリクエストした。

「それで。いいかな」

「ええ、わかりました」

D」は俺のリクエストに気さくに答えてくれた。

「じゃあ今から」

「それでな。それじゃあ」

ここまで伝えて俺は電話を切った。それから電話ボックスを出て一人夜道を歩きはじめた。夏の海沿いの夜道は誰もいない。遠くに家の灯りが見えて時々車が行き交うだけだ。その車のライトの灯りも見ていてもどうとも思わなかった。その時の俺にはどうでもよかった。

煙草を吸いながら鞆の中のラジオを出してヘッドホンを付ける。するとその時に曲がはじまった。その歌を聴きながら俺は昔のことを思い出していた。

俺はトランジスタのポリウムを思いきりあげた。そのうえであいつに言ってやった。

「じゃあ踊るか」

「ええ」

あいつは俺の言葉に笑顔で頷いてくれた。

「それじゃあ。踊りましょう」

「はじめてだけれどな」

「そうよね。二人で踊るのはね」

場所があいつの家だった。俺ははじめてあいつの家に来てそれで二人で踊りに入った。

第二章

その時のことは今でも覚えている。楽しい時間だった。けれど今思うとそれはすぐに終わった。本当に笑ってしまふ位にすぐに、いきなり終わった。

「さよなら」

ついこの前のことだった。俯いて申し訳なさそうなあいつにこう言われた。

「御免なさい」

「そうかよ」

何が言いたいのか、何があつたのかはすぐに察しがついた。俺は一言で終わらせた。

「じゃあな」

「それだけでいいの？」

「言っても仕方ないだろ」

俺はこうあいつに返した。

「そうだろ？じゃあいいさ」

「そう。許してくれるの」

「許すも何もないさ」

俺はまた言つてやった。

「御前はそうするしかないんだからな」

「そう。それじゃあ」

「楽しくやれよ」

微笑みを作つて言つてやった。

「二人でな」

「ええ」

ここまで話して終わりだった。あいつは別に好きになつた彼氏のところに行った。さよならで終わった。酷い仕打ちを受けたと思うがそれでも俺は受け入れた。

それで今ここにいる。胸にある銀のロケットがある。中にはあいつの写真が入っている。俺がペアで買ったやつで多分今もあいつの胸にこれと同じものがある。

けれど今そこには俺の写真はない。別の奴の写真がある。俺はそのことも思った。

「いいさ」

俺は歩きながら呟いた。

「それでさ」

曲はかかっている。その曲を聴きながら一人歩きつつ呟いていた。夜道には相変わらず誰もいない。

「あいつと抱き合いながら俺のことでも笑ってればいいさ」

こんな自嘲めかした言葉を呟きながら浜辺に出た。ここも昼の賑わいはなくてただ波音だけが聞こえる。黒い海から時々白い波が見えるだけだった。

俺はそこで胸のロケットを取って。右手で海に向かって投げ込んだ。

「もうな。これでな」

投げ込んだから笑ってやった。動きは曲に合わせていた。

「完全に終わりってわけだ」

笑いながらここでも呟いた。

「この話はな」

曲はまだかかっている。今度はその曲で口笛を吹いた。

口笛を吹きながらその真っ黒い海を見る。見ているとふと未練も湧いてきた。

それがどうにも歯がゆかったけれど。それでも俺はまた呟いた。

「ああ。あれだな」

その歯がゆさに苦笑いしながらも呟き続けた。

「若しも振られた時はやってくれよ」

俺は言った。

「この歌、ダイヤルしてくれよ」

そうすれば何をするのか。それだった。

「御前迎えに行くからな」

実はこの歌はそんな歌だった。そうした意味も込めてリクエストしたのも事実だ。

けれどこんなことは有り得ないとわかっていた。だから苦笑いで済ませた。曲が終わると俺はそれで浜辺を後にした。そこでまた煙草を出して吸って。

「帰るか」

最後にこう言って家に帰った。誰もいない一人だけの部屋に。そのまま一人で寝て終わりだった。

涙のリクエスト

完

2009・8・27

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0884k/>

涙のリクエスト

2010年10月9日11時38分発行